

活動に至った理由・背景

活動地である三次市上田町は標高 350 ~ 550 メートルの棚田や里山に囲まれた山里です。結いの精神が今なお残る美しい農村ですが、2003 年に小学校が廃校に、2004 年には十郎集落の常住者が不在となり、「廢村」へ向かうストーリーの始まりにしてはならないと危機感を感じています。

2011 年、十郎集落の古民家の持ち主が廃校(母校)を活用した交流事業を知り、「ふるさとである我が家を地域活性化の役に立ててもらえないか」と相談に来られました。その家は長期不在であったため、今にも竹林にのみ込まれそうな状態でした。

この古民家での再生活動や交流・体験が、地域と古民家や農村に関心のある人々とのつながりやこれから暮らし方を考えるきっかけになれば、田舎の景観や文化等を、体験を通して次の時代に手渡していく場になれば、との思いが膨らみ、HC 財团のご助成に力をいただき、十郎ゲストハウスづくりがスタートしました。

活動地域の概要

山の上に開けた離れ小島のような町です。他の町から離れていることや、水に乏しくため池を共同管理しながら農業をしていることから、上田町民には自治意識や連帯意識があるようです。今なお、半自給的で自然を生かした暮らしや結いの精神が残り、人々の心を寛容に受けとめるこの地域は「ふるさと」という言葉がしっくりくる場所です。

それでもやはり、少子高齢・過疎化が年々すすみ、美しい景観や伝統文化、農地、里山等を維持することが急速に困難になってきています。

一方、この 10 年間に I・U ターンで 7 世帯 23 名(内、子ども 10 名)増えました。上田町はトコトン田舎、不便ですが、暮らしの知恵ある人々と豊かな自然に囲まれていて、ここにいれば何があっても生きていける気がします。これから持続可能な暮らし方を考えるヒントがいっぱい古くて新しく、面白い。でもここに人が住み続けなければ、そして人が関わりつけなければ面白く豊かなものを引き継いでいけません。

ふるさとをつないでいく挑戦を、これからもつながりながら、つづけていきます。

人口 / 208 人(男 : 103 女 : 105・小中 10 人・65 歳以上 114 人)

世帯 / 92 戸

高齢化率 / 54.81%

(平成 24 年 4 月 30 日現在)

設立年月 2003 年 7 月

法人化年月 2012 年 1 月

メンバー数 47 名

代表者名 檜谷 義彦 (ひのきだに よしひこ)

〒728-0624 広島県三次市上田町 388 旧上田小学校

TEL.0824-69-2888

hoshihara@twoone.net

<http://www.hoshihara.org>

団体のミッション

わたしたちは、ふるさとを未来につなぐために、

自然豊かで昔からの暮らしが今なお残る広島県山間部の木造校舎を拠点とし、
交流や体験を通じたみんなのふるさとづくりと未来を担う人づくりを行っています。

十郎ゲストハウスづくりを通して 田舎シェア文化創造

ほしはら山のがっここう
〔広島県三次市〕





古民家周辺の竹林伐採・草刈り作業～小屋の解体



三次市上田町のNPO法
人ほしら山のつづが
て8の西日
町内の古民家募
開年えた竹林を伐採するイ

古民家再生へ
竹伐採協力を

参加も可能。

参加費は1000円

000円。

弁当や作業用手袋な

どは持つ。

山のつづが、古民家募

生やエノキの保育活動を通

じて地元に伝わる文化の維持

や昔の住まいを体験しながら

現の暮らしについて考え

るプロジェクトを開催してい

ます。

接する者ある工事の周

る。今回はその二環で新たに

竹林伐採してある。

古民家は1世帯(2戸)の同

隣接する家である。

竹林伐採は7月6日午前

7時から午後4時。

一部のみの

enet

(馬上)

電

子

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ

ト

モ



みんなで壊して、
みんなで作る。



二日間の作業で母屋周辺および小屋内部の竹の伐採、庭の雑木の間伐・草刈りの、予定していた一次作業が終了しましたが、予定外に行うこととなつた小屋の解体が四分の一程残りました。また道具を巻き込んだ竹の根元に課題を残しました。

同時に行われたエノキの樹の保護活動について・・・七日に行われた樹木医の調査により広島県で四位タイの巨木であることがわかり、樹冠の範囲の竹全伐と周りの竹林の整備がすすみました。エノキの近くの竹林の中には小さな荒神さんの祠があり、これもまた荒れた竹藪の中に埋もれていきました。冬にこの周辺の竹林整備をすることになりました。

藤田盟児教授による調査



竹取合戦イベント中、家財道具整理が同時に行われました。持ち主T氏が立ち会いましたが兄弟姉妹の荷物もあり、処分してもよいか判断しかねるものが多くあり、とりあえず玄関土間に移動させることで床面を出して今後の調査ができる状態にしていきました。

二日目、解体作業中に小屋から移動式のおくどさんや昔の道具がいくつか出てきました。これらは今後、体験活用できると思われる所以軒下に保管しました。

古民家内部の 家財道具整理と 現状調査準備



(持ち主T氏への聞き取り)

古民家の調査

竹取合戦イベントに合わせて7月7日に藤田盟児教授（広島国際大学工学部住環境デザイン学科）を中心に、T氏への聞き取りを合わせた古民家の調査が行われました。藤田先生の家族は2012年4月に呉市より上田町にIターンし、現在家族5人で暮らしています。先生宅となつたのも古民家です。

持ち主T氏が改めて調べてくださり、この家は明治15年に建てられ、事業を行った平成24年でちょうど築130年になることがわかりました（それまでT氏に大正時代の建物ではないかとお聞きしていたので新聞や広報で「大正の農家を守る」と表現していました）。

この家には元々井戸水がなく、ため池・山水を利用して暮らしていたこと、10年前の道路改修で池がなくなり、水が切れてしまったことがわかり、「水確保」は今後の活動の大きな課題となりました。

玄関土間に「からうす」跡がそのまま残っています。また「おくど（かまど）」があった場所を確認しました。

作業中、ついに奥の間二室の床が落ちました。また縁側の上の土壁の一部も落下。裏の屋根が一部大きく破損していて、柱材も腐っている箇所があることが分かりました。

建物使用貸借契約書（覚書）を交わしました

土地および建物使用貸借についての契約（覚書）を持ち主T氏とNPO法人ほしら山がつこうの間で交わすことになりました。お互いの約束事をわかりやすく整理し書いておくことで、今後T氏の親類などにも説明しやすくなるように、またこの事業に関わっていくメンバーが活動しやすくなるようにするためです。これにより、古民家の家財道具の処分・活用、改修などがやりやすくなりました。

視察 12月8～9日（1泊2日）

古民家再生を次々に行いながらワカモノや交流者のチャレンジで新たな農村価値創造を繰り広げている、隣県の中山間地・岡山県美作町上山集落にある「いちょう庵」・「梶並山村シェアハウス」を訪問しました。現在上田町の地域づくりでは60歳以上のメンバーがバリバリの中心となっていますが、この度は20～50代の若者が行くことになりました（町民5名、交流で半分くらい上田町民化している20代、最近Uターンした20代、町出身の40代夫婦というメンバーです）。

「いちょう庵」は十郎古民家と同じように竹藪に埋もれていたカヤ葺トタン屋根の家だつたとのことで、改修中の写真などを見せていただきました。主に若者の手作業による古民家再生によって農村にコミュニティースペー

9月7日、この古民家改修の方向を

考るワークショップが行われまし

た。有識者として藤田盟児教授、古民家

改修デザイナー浦田剛大WIT古民

家再生大工チームが参加しました。

浦田剛大・シンガーソングライター

（フォークシンガー）でもあり、地域づ

くりにも関わるアーティストで、糸島

クラフトフェス（福岡県）・鹿家駅（福

岡県）の木造駅舎を守る活動などに参

加しており、広島県内の古民家再生デ

ザインにも携わっています。

7月の作業によって古民家の傷みが

より見える状態になり、「このまま改修

プロジェクトを継続できるか不安」と

の投げかけを受けて、現地調査へ出かけました。

調査の後、「不可能はない」「面白い」などという浦田氏と大工チームの力強

い言葉がきっかけとなり、改めてワー

クショップを前に動かすことができま

した。

まず、上田町には上・下水道がないこと、今回の古民家には水もなく、現在は電気もひかれていないことを生かし

た方向が提案されました。そこで当初の計画にあつた『アンプラグの家づくり』というテーマが出されました。改修する家は、電気をひかず、ランプを点

し、火をおこして料理をし、暖をとる体験ができる家にしてはどうか。水は昔の人が水甕に運んでいたように学校の井戸からタンクに汲んできて使うのはどうか。そこからまずスタートすれば、次の物語はみずから生まれるだろうといふ内容の対話が交わされました。3.11の後でもあり、「今の暮らし」「これから暮らし方」を見つめることが出来る『一番シンプルな暮らし・暮らしの原点が体験できる家』をつくろうと



いう青写真(夢)が描かれました。

改修方法については、地元の知恵や技術をもつた大工や職人経験のある方を先生に、できれば地元材を使い、

大学生や関心のある方々の学び合い

型のワークショップ開催によって行

うことが提案されました。改修にかか

る年月については、5年間位かけながら優先順位を判断しながら出来るこ

とから一歩ずつすめていく方向になりました。

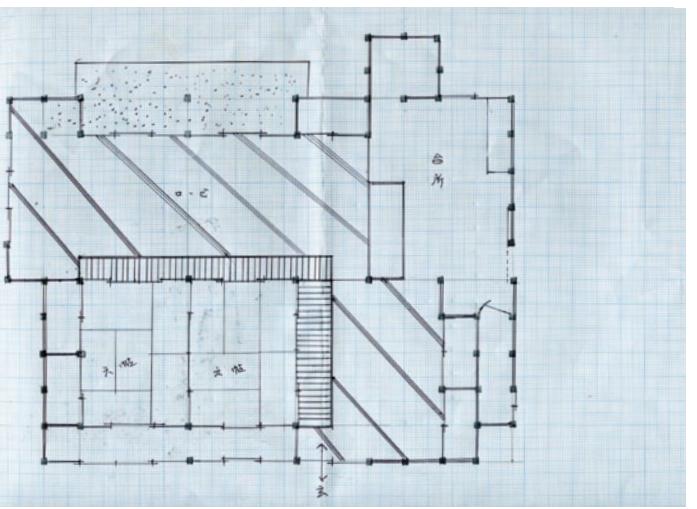
これから5年間、古民家再生ワー

クショップイベントを通じていろんな

方々と出会えるのが楽しみです。また住民の途絶えたふるさと十郎に人々の活気を届けたいです。



十郎古民家図面



力隊が中心となつて企画や活動をしていました。ちょうど取材でジョン・ギャスライトさん（アーレント・ツリー・イング講師他）が訪問して来られていて盛り上がりました。地域の若者との交流夕食会では持ち寄り材料（野菜・猪など）を囲みながら、地域おこし話題で盛り上がりました。

翌日は梶並地区の改修中古民家や「おたまし住宅」を見て回り、I Uターンへの積極的な活動に刺激を得ました。

空き家→改修→活用（Iターン、シェアハウス、カフェ）の流れを作っている両地区的活動が参考になりましたが、自分たちの活動は継続活動費をどうするか、悶々としながら帰りました。「わしもやりてえー！」という視察メンバーの言葉が印象に残りました。

「古民家大掃除大会」

「冬の竹取合戦」

「古民家おそうじ隊」

1月。ボランティアを募り「古民家大掃除大会」を開催!

家財道具をみんなで家の外に全部出し、参加メンバーが持ち帰ったり、家電リサイクルセンターに引き取っていただきたりして処分していきました。

2月。「冬の竹取合戦」。小雪の積もった日、崩れた倉庫を全部取り払い、石垣の外まで竹林を全伐!!

これらの作業はどんどんきれいになつていくので、気分スッキリします!! 古民家大掃除大会や竹取合戦はストレス解消にいいかもしれません!!

3月以降、細かなお掃除や家財道具処分には「古民家おそうじ隊」が出動しました。また重機ユンボを出動させ、半壊した風呂小屋撤去、2月に全撤去完了した小屋部分の荒れた土地をならしました。

十郎古民家の物語は始まったばかり。
これからどんな出会いが待っているでしょう?



今後の予定

活動資金あつめ

十郎古民家再生はなるべく費用をかけずに改修を行っていく方向ですが、どうしてもかかる費用がかなりあります。現在、古民家再生の共感チーム盛り上げの作戦中です! 寄付金・参加費また助成金など活動資金を得ながら、夢を実現させていく予定です。

再調査

2013年度、現在の柱の強度や状態について、5月より広島国際大学の先生方が建築系の大学生と調査してくださることになりました。今後50年もたせる再生にするための検討を行い今後の改修計画に反映させます。

飲み屋なんてない山間部。地元のおやじ中心に、年に4回の赤ちようちゃんクラブも発足。ワカモノもカフェイベントを企画。カフェ2日目は蓄音機のレコードコンサートを予定。

古民家にお泊まりキャンプ。鍋パーティー。ときに竹林をライアップしたバックを生かした自然感たっぷりライブ。外灯のない真っ暗な夜、見上げた空に天の川。農村の暮らしを思いっきり体験できる、みんなのふるさと。